

# 旧石器時代後半における石器群の諸問題

## —相模野の遺跡間接合から—

旧石器時代研究プロジェクトチーム

### はじめに

昨年度、プロジェクトは編年研究の問題点を指摘し、今後新たな相模野編年の構築へと歩を進めた。

しかし、2000年7月11日（火）、吉岡遺跡群B区B1L層出土石器と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡B1L層出土石器が接合した。両遺跡は、二俣川出土品整理室で日夜報告書作成業務を遂行している。遺跡間接合の目論見は、各遺跡出土石器観察の過程で「似ている」「付きそうだ」、「是非機会を持とう」という研究者間の心的交流がかなり古くから存在した。当財団あるいは埋蔵文化財センターの時代から、至近距離の宮ヶ瀬遺跡群内でも試みていた。あるいは、各種研究会での石器観察会、そして吉岡遺跡群や用田バイパス関連遺跡群の発掘調査時など、しかし、本格的な整理作業時での遺跡間接合の試みは頓挫していた。

かねてより、吉岡・用田両遺跡の同一層位における類似母岩の観察から、いつかはという思いであった。そして、はたせるかなその日は現実を迎えたのである。当財団が調査を実施した両遺跡の整理作業が奇しくも同一層位が、同一整理作業室で実施された。異なる行政単位の出土品整理を同一組織下が実施できた強みがある。

相模野における2000mという接合距離はその長さのみに目を奪われてはならない。日本の石器研究を進展させてきたフィールドとしても、また、遺跡の範囲、流域といった従来の石器群というまとまりを超えた、新たな石器研究方法の構築を図る嚆矢ともなりえよう。いわば個別別資料研究であるモデルとしての砂川石器研究を踏まえつつも、従来の遺跡内研究を超越した、間遺跡研究の新たな吉岡用田石器研究のモデルの構築も必要である。

そこで、2000年度は今後の更なる遺跡間接合の実現を目指しつつ、B1L層を中心とした「接合」について総括する（砂田佳弘）。

### 2000年 旧石器時代研究プロジェクトチーム活動報告（11月30日現在）

- 2月16日 「旧プロ、今後の問題点と課題～編年とは何ぞや～」 砂田佳弘
- 3月16日 「槍先形尖頭器の編年について」 白石浩之
- 3月27日 「白石浩之さん壮行会」
- 5月16日 「相模野台地の暦年補正年代」 砂田佳弘
- 7月17日 『情報交換』日本考古学協会鹿児島大会、資料集成について
- 8月16日 「旧石器プロジェクト2000年度の活動について」 栗原伸好・砂田佳弘・吉田政行
- 9月14日 「吉岡・用田遺跡間接合記者発表の経緯」 吉田政行
- 10月16日 「石材組成と地理的分布」 三瓶裕司
- 「ニューギニア高地採集の石斧・石斧柄について」 加藤勝仁
- 稲荷山貝塚土層断面観察
- 11月16日 『情報交換』

## 石器研究「接合」前史

岩宿発掘以前の石器に関わる接合は寡聞だが、接合の契機が折れであり、剥がれにある点は間違いない。「割裂の際か或はその後に折れたらしく、剥片の衝撃端が失はれhinge fractureを示すものが多く、剥片内面にbulbsをとどめるものが少ない」(渡邊 1948 p p.35)という先駆的な「折れ」の観察を示している。

通常の生活器具の補修における穿孔や接着の痕跡を見いだすにはさほど困難でないだろう。石器の接合については「割り」「割れ」の分類を基本に、個体別資料の分類基準など、接合原理を「破壊」という視点から、従来の旧石器研究を品評しつつも批判的に統監している(五十嵐 1998)。「破壊力学」の指摘は従来の割れ円錐による理解のみにとどまっていた石器製作の物理的理解を深化するには極めて有効であり(山田・志村 1989)、石器製作過程の分別にも有効な方法が見え隠れしているのである。

ここでは、日本の石器研究における「接合」意識の表現を報文を基礎として採りあげ、石器研究における「接合」の捉え方やその見方について前史を繙いてみたい。接合自体はすでに岩宿の整理作業に始まっていた。ただしその接合は折損した石器の断面が接合して完形に復原されるにとどまったようだ。「サイドスクレイパー様石器とエンドスクレイパー様石器」が、「採集した時はいずれも折半していて、整理の際にそれぞれ一個体になるものであることを知った」「しかし、折れた面を見ると、器面と同程度の石質変化を起こしているので、これが二つに割れたのは最近のことではなく、おそらく使用時に破損したものと考えたい。そうすれば、これらの石器はこの位置で使用され遺棄されたのであって、A区におけるこの地点の石器群は、他から移動されたものではなく、元位置をそのまま保っているものといえよう」(杉原 1956 p p.20)。「本石器は遺跡で二分して発見されたが、後に一つになることが知られた。その接合面を見ると、剥離面と同じような石質変化している」(杉原 1956 p p.36)。これらの表現法は、「器面」に対する「折れた面」であり、「剥離面」に対する「接合面」である。いわば一個の石器の構成面であり、接合という動的意識は見いだせない。換言すれば、相沢忠洋採集の有槌尖頭器を「尖頭器として使用中に破損したものか、何かの意図をもって行われた剥離であるか分からない」(杉原 1956 p p.48)。との明言に表出している。しかし、類似資料のない時代であってその「石器」の剥離面の切り合い関係を透徹する観察眼に驚異するのである。しかも、風化の度合い、原位置、遺棄の問題定義など、さらに「原料を石塊あるいは母岩の形で受け入れて」(杉原 1956 p p.3)にいたっては、原産地と石材環境にまで言及し、その後の石器研究の資料操作における基本である「母岩別資料」や「個体別資料」にまで視野に容れていたと言えよう。

岩宿で指摘された石器の折損による接合資料ではなく、剥片剥離を如実に表現する接合作業は、茶臼山遺跡(藤森・戸沢 1962)が最初だろうか。「昭和30年の末頃にこの遺物を実見する機会を得て、その時偶然に重なり合うのに気付いた。既に長野県茶臼山遺跡の石片で同様なことを経験してはいたが、5点の多くのbladeが重なるのは、当時として予期しない事実だった」(松沢 1960 p p.1)という述懐は、福島県岩瀬郡鏡石村成田遺跡の資料である。成田遺跡での接合以前に茶臼山遺跡での接合が実践されたのである。

件の茶臼山遺跡では、「剥離作業の一部を具体的に示す接合可能な2つの資料が発見された」(藤森・戸沢 1962 p p.18)。その一つは、剥片三点の接合資料であり、もう一つは、残核一点に剥片二点の接合資料である(藤森・戸沢 1962 p p.17)。ただし、その表現は「接合可能な2つの資料」であり、未だ二個体の接合資料ではない。茶臼山遺跡の発掘調査は1952年の第4四半期に実施されている。すると、接合は1952年以降、成田遺跡での接合1955年以前となる。この時期が日本における接合作業実践と成果の始まりにあたろうか。

実践的接合作業は、剥片の表裏を認識し、石材の基質・色調、風化度、打撃面や打面縁辺の状態、剥離面のリング・フィッシャーの発達など、石器の観察眼が試される場でもある。換言すると、いかに母岩別分類が的確に実践されているかであり、接合の事実によってその母岩別分類の正当性が検証されるのである。

茶臼山遺跡の接合資料は黒曜石製の単設打面Ⅰ類剥片剥離工程と90度打面転位Ⅲ類剥片剥離工程である。成田遺跡では、Ⅰ類剥片剥離工程で、打点を左右に移動し稜線を形成しながら真正な縦長剥片が5点接合する資料である。しかもどの剥片にも打面縁辺調整あるいは、基部調整加工の施されたナイフ形石器を主体とするのである。接合者は「予期しない事実」と述べるが、石材こそ違え茶臼山の実践が意識下に存在したことは想像に難くない。

成田遺跡では、「bladeとbladeとが数点接合し合う事」、「番号の若いものが古いものの上に密着する」（鳥畑 1956 p p.25）と、明確に「接合」あるいは「密着」という表現をしているのである。さらに、接合の意義が「石器から剥がされた石片もまた加工の考察に重要であり、それが接合できる場合はさらに立体的に経過を理解するための重要な資料となる」（松沢 1959 p p.2）と述べられるのである。「立体的に経過を理解」とは、剥片剥離工程をより十分に理解することであり、指標石器による石器研究の趨勢にあって、いち早く「石片」とその接合作業に石器製作工程復原の重要性を説くのである。その研究姿勢は一貫し（松沢1997）、接合資料の読み取りは継続するのである。

その後の接合資料は、砂川遺跡の石器研究以降急速に増大した。一遺跡の集中地点内での接合資料は、集中地点間の接合資料と歩を進めた。数メートルの集中地点間の接合距離は、やがて数十メートルを超える接合距離となる。そして、「接合G3は本遺跡から約500m程離れた荷鞍ヶ谷戸遺跡から江南町在住の関口氏によって採集された彫刻刀形石器と本遺跡第1ユニットから検出された削片が接合した」（川口編 1993 p p.58）のである。ついに登録上では異なる百メートルを超える遺跡間の頁岩製石器の接合が実現した。ただし、一方は表採資料である。ついで、「1次調査時から切望されていた5B地点と1G地点の遺跡間（地点間）接合が根気ある接合作業から現実のものとなった」（八ヶ岳旧石器グループ 1996 p p.50）。約400m離れた二地点での黒曜石製剥片の折損資料が接合し、削片が1点接合する。さらに、「頁岩の彫刻刀形石器（下モ原Ⅰ遺跡出土）と製作時にできる彫刻刀形削片（居尻A遺跡出土）の接合関係が得られました」「2遺跡は段丘面を違えており、その比高差40m、距離にして600mの「遺跡間接合」と言うことになります」（山本・安部 1998 p p.4・5）。異なる段丘面の遺跡間接合はついに500mを越え、石材も頁岩製と黒曜石製があり、残核も含まれる10点以上の接合関係を持つに至ったのである。そして、何れの接合資料も細石器の時期あるいは彫器に関連するという共通性がある。

そして、今回の吉岡・用田の接合である。黄玉石の接合に端を発し、その後硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩と3母岩250点に及ぶ接合資料が提示されたのである。ナイフ形石器、剥片、碎片、残核という器種構成は搬入原石までも復原し、石器再生と接合距離の問題（砂田 1993）も新たな展開を模索することとなる。

接合遺跡の集中地点間の距離は2km、比高差12m、従来の至近距離以上の遺跡間接合の成功である。両遺跡は県内でも有数の重層遺跡であり、出土層位のB1層下部はAMSによる年代測定で、BP19500年が算出されている。黄玉石は伊豆半島南部、凝灰岩・珪質頁岩は相模川水系の石材が想定される。現在、相模野台地における同一層位出土遺跡の存在する関係各機関とも協力して同一母岩の検討に入りつつある。今後のさらなる遺跡間接合が待たれるところである。ただし、骨片や角など、石器以外の資料が散乱するパンスヴァン遺跡（IV2層）ですら「説明のつかない関係」（鈴木 1996 p p.98）の存在を念頭におくべきである（砂田佳弘）。

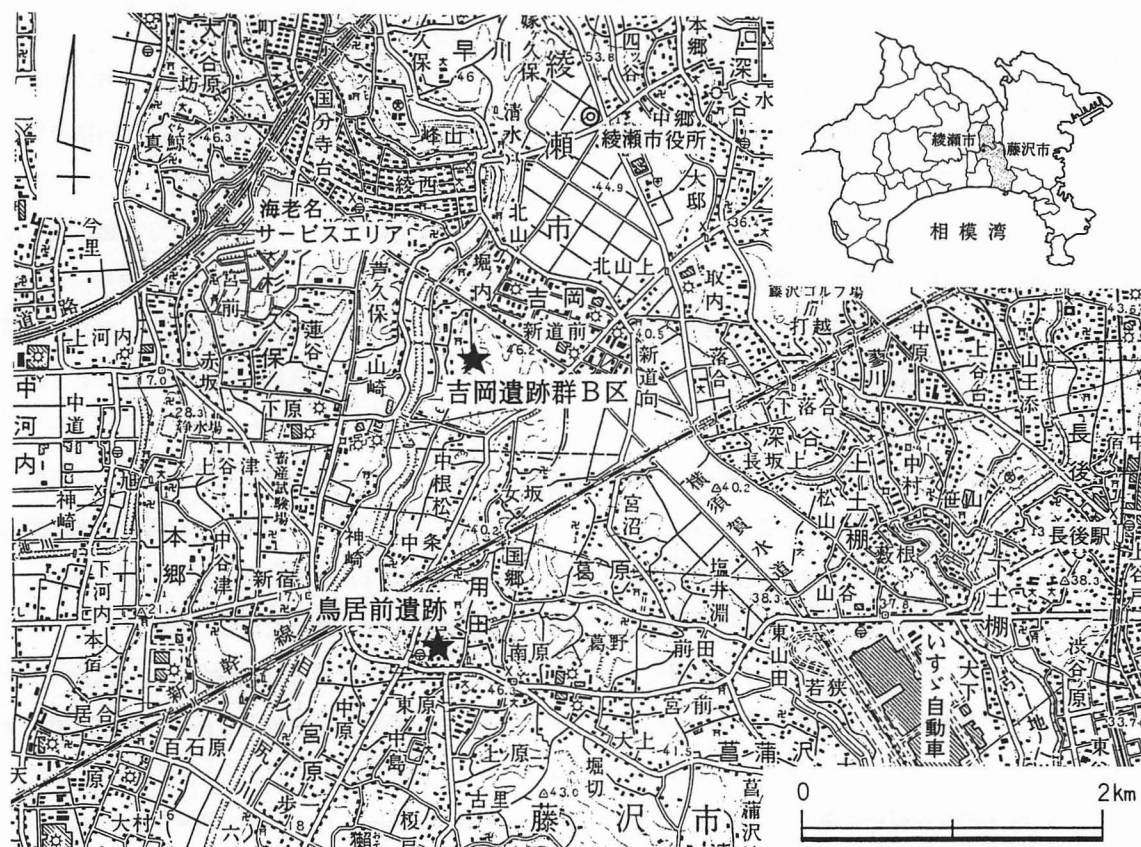
## 吉岡遺跡群B区からみた遺跡間接合

吉岡遺跡群は神奈川県中央部、綾瀬市に所在し、相模川の支流で、南流して相模川に合流する目久尻川の左岸にあたり、地形面では高座丘陵上に立地する（第1図）。同じく目久尻川左岸の高座丘陵上には、吉岡遺跡群から南へ2kmほど離れたところに用田鳥居前遺跡を含む用田バイパス関連遺跡群が位置している。

吉岡遺跡群は、神奈川県内広域水道企業団による綾瀬浄水場建設事業に伴って、当財団により発掘調査がおこなわれた。B区については、約70000m<sup>2</sup>を対象に、1990年10月～1994年9月までに第1次調査が、1998年4月～2000年3月にかけて第2次調査がおこなわれた。第1次調査分については、すでに本報告がなされており、A T火山灰降下以前のB 4層上位を主とする後期旧石器時代前半の遺物群や後期旧石器時代後半のL 1 H層上位を主とする細石刃石器群など旧石器時代から縄文時代初頭にかけての複数の時期にわたって残されたと考えられる遺物群が発見されている。筆者の担当した第2次調査分については、現在、出土品整理作業の途中であるが、B 4層下位を主とするA T火山灰降下以前から縄文時代初頭にいたる複数時期の遺物群を認めている。

ではここで、約2kmの距離を隔てて遺跡間接合が確認された資料について、調査経過を交えながらその内容を確認してみたい。

吉岡遺跡群における遺跡間接合の該当資料は、1998年4月～2000年3月にかけておこなわれた吉岡遺跡群B区の第2次調査で発見されたものである。調査経過としては、まず1998年の10月下旬に遺跡中央部西端付近の試掘坑から石器が出土し始めた。出土状況から、遺物集中をなす可能性が高いため、掘削範囲を拡張して一ヶ月間あまり精査し、実際に遺物集中の存在を確認し記録作業をおこなった。拡張精査した範囲は西へ



第1図 遺跡の位置



向かってやや下り気味の地形で、部分的にローム層が軟質化しているところがあり、層位の認定が厳しい箇所はあったものの、遺物群はおおむねB 1層の下位を中心に分布している様子が捉えられた。これらの遺物群は、約700点以上の石器および100点弱の被熱礫で構成され、視覚的には二つの集中部分と周辺遺物から成り立っている。遺跡間接合が確認された3種類の母岩別資料はこの遺物集中に含まれる石器群である（第2図）。

また、吉岡遺跡群B区での上記遺物検出をさかのぼること約2年8ヶ月、1996年2月、用田鳥居前遺跡の中央部でB 1層下位から遺物集中と大形炭化材が検出されている（註）。遺物集中とその周辺遺物は約30点の石器と40点あまりの被熱礫で構成され、大形炭化材から約15m離れたところで見つっている（第1図）。吉岡遺跡群B区出土遺物との接合が確認されたのはそれらの資料である（写真1）。

次に遺跡間接合に該当する母岩別資料について確認する。石材は、①硬質細粒凝灰岩、②碧玉（黄玉石）、③珪質頁岩の3種類であり、内訳は

① 吉岡B：ナイフ形石器・石核・剥片類などで200点以上（88点）、鳥居前：ナイフ形石器・剥片類4点（4点）。

② 吉岡B：ナイフ形石器・剥片類で28点（5点）、鳥居前：剥片1点（1点）。

③ 吉岡B：剥片12点（1点）、鳥居前：剥片3点（1点）

となる（（ ）内はそのうち接合している石器）。さらに、①については、鳥居前資料がナイフ形石器1点と剥片3点のみである一方、吉岡B資料には原礫面を残す剥片と石核がともに接合資料に含まれ、また、長さが1cmに満たないような剥片類も数多く含まれている。そのため、吉岡遺跡群で剥片生産および利器の製作をおこない、利器およびその素材を持って用田鳥居前遺跡に移動した可能性が高い。

さらに、両遺跡における母岩のあり方や遺物の量について比較すると、共通または類似した母岩とそうではない母岩が存在していることから、吉岡から用田へ移動する間に少量ではあるが石材補給をおこなっていたと考えられる。また、遺物量については吉岡Bの遺物集中と用田鳥居前の遺物集中とでは開きがある。そして②や③の資料については、どちらの遺跡にも石核が残されてはいないが、①の資料については、石核は持ち出されておらず吉岡Bにそのまま残されている。

これらのことから現時点では、吉岡Bに滞留していた集団がそのまま用田鳥居前に移動したというよりも、集団の一部が採集・狩猟のために用田の地を訪れ、その際にハンティングキャンプとして占地された結果、用田鳥居前の遺物集中がのこされたと考えている。なお、上述のように今回の該当資料は現在出土品整理中であり、母岩分類を始め、調査報告刊行後は報告書の記載や見解を優先していただきたい。（吉田政行）

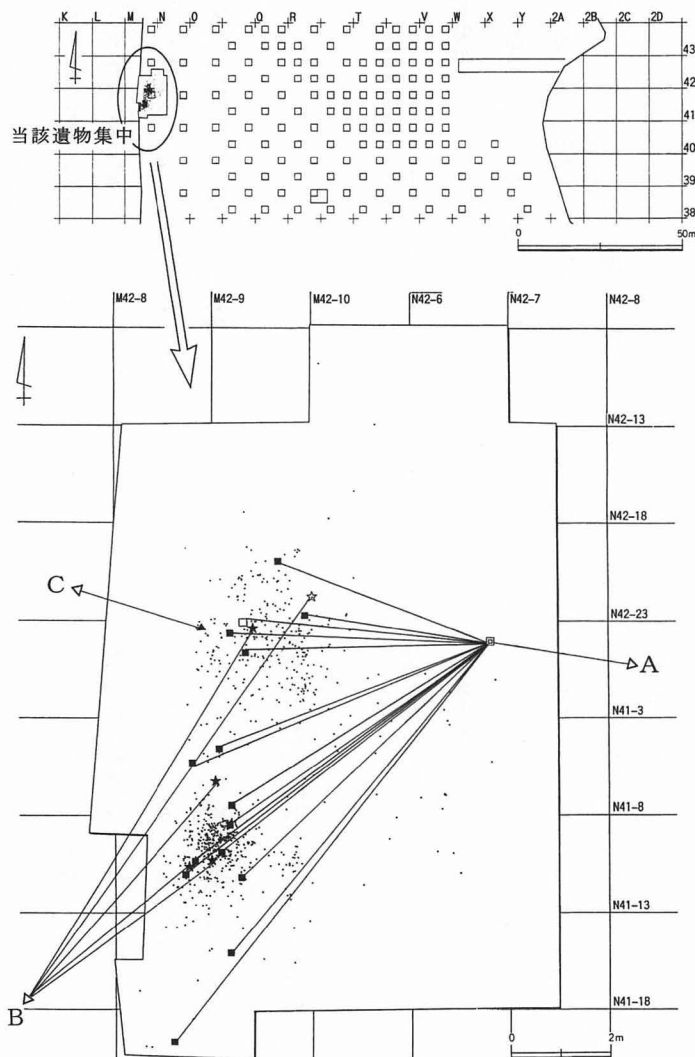
（註）現在出土品整理途上である用田鳥居前遺跡についての調査経過と遺物の出土状況は、栗原伸好氏のご教示による。

## 遺跡間接合からみた用田鳥居前遺跡

今回、綾瀬市吉岡遺跡群B区出土石器と約2kmの距離を隔てて接合した資料は、用田鳥居前遺跡B 1層下部から出土した石器である。以下、調査経過を踏まえながらこれまでに明らかになっている点を整理する。

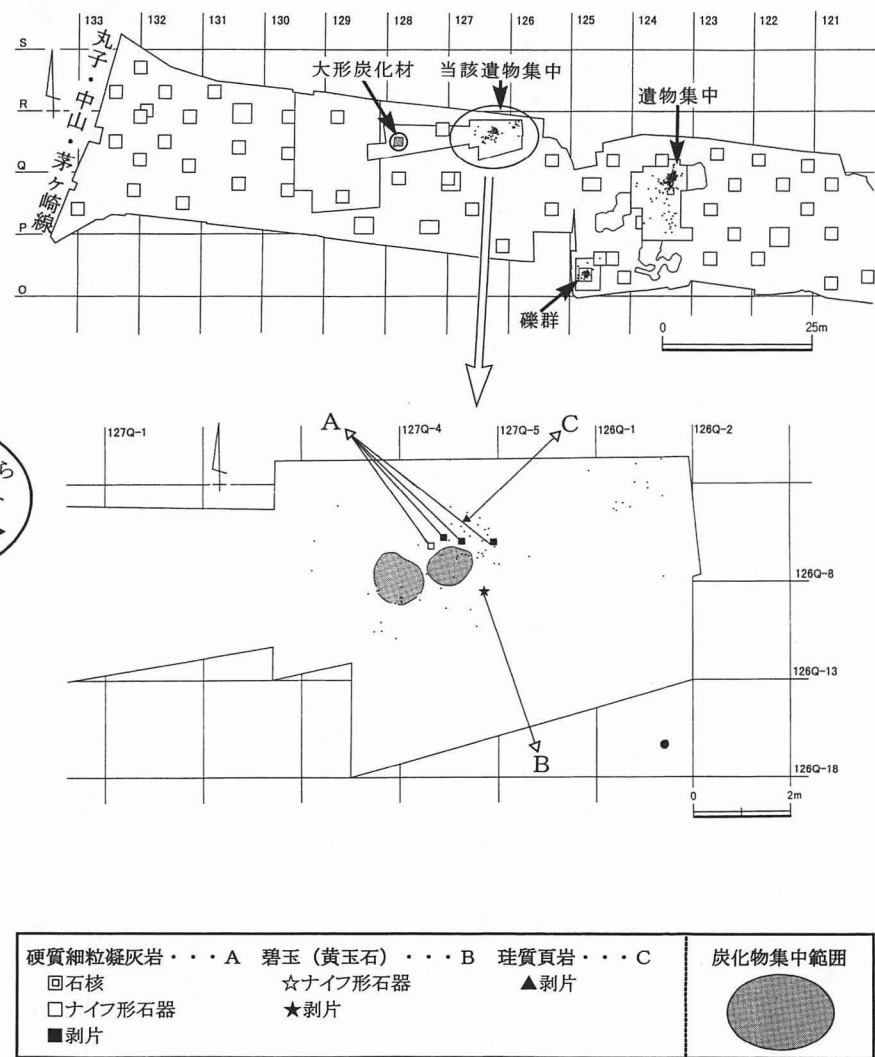
用田鳥居前遺跡の調査は、1994年4月～1998年12月にかけて実施されており、今回の資料は1995年度の調査時に出土している。遺物の出土状況としては73点ほどの小さな集中であるが、平面的には調査区中央の炭化物粒の集中部を取り囲むように出土している部分と北東隅の焼け礫を主体とした部分との2つに大きく区

# 吉岡遺跡群B区（綾瀬市）



吉岡遺跡群B区から  
用田鳥居前遺跡へ  
約2Km

# 用田鳥居前遺跡（藤沢市）



旧石器時代Pj

第2図 吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の遺物分布

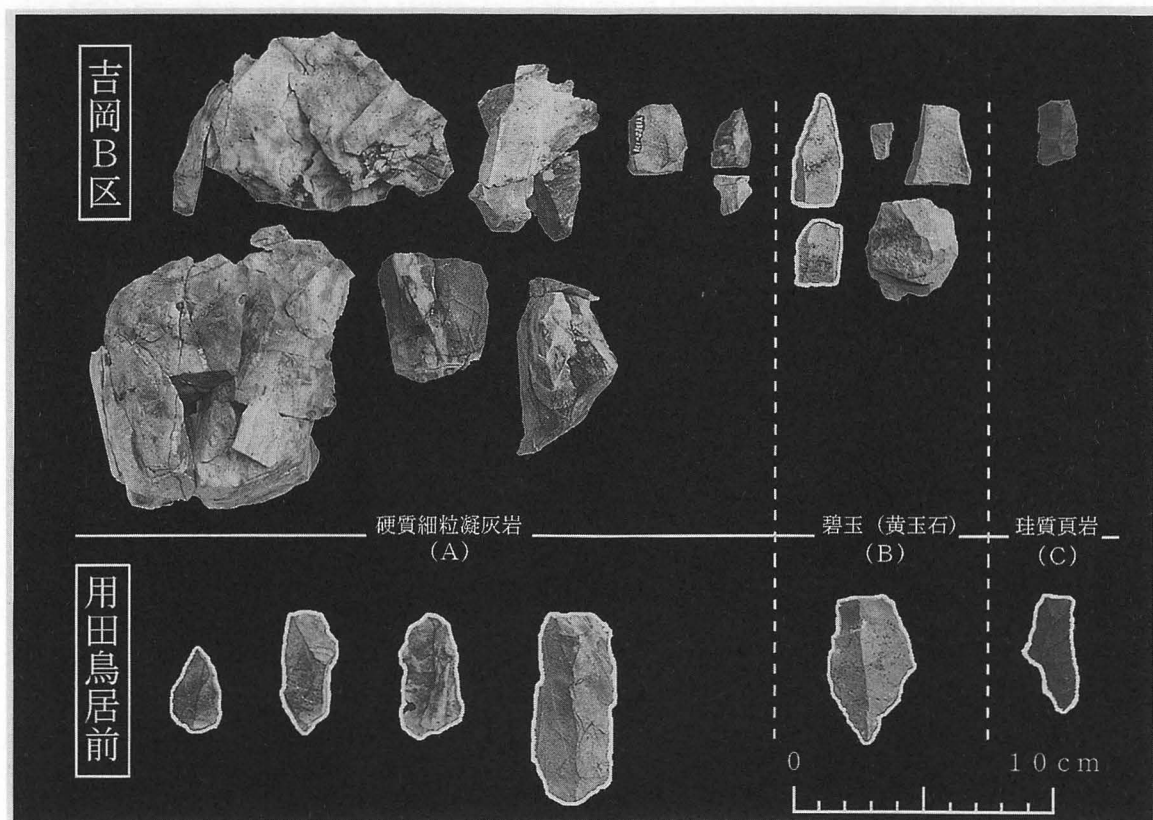
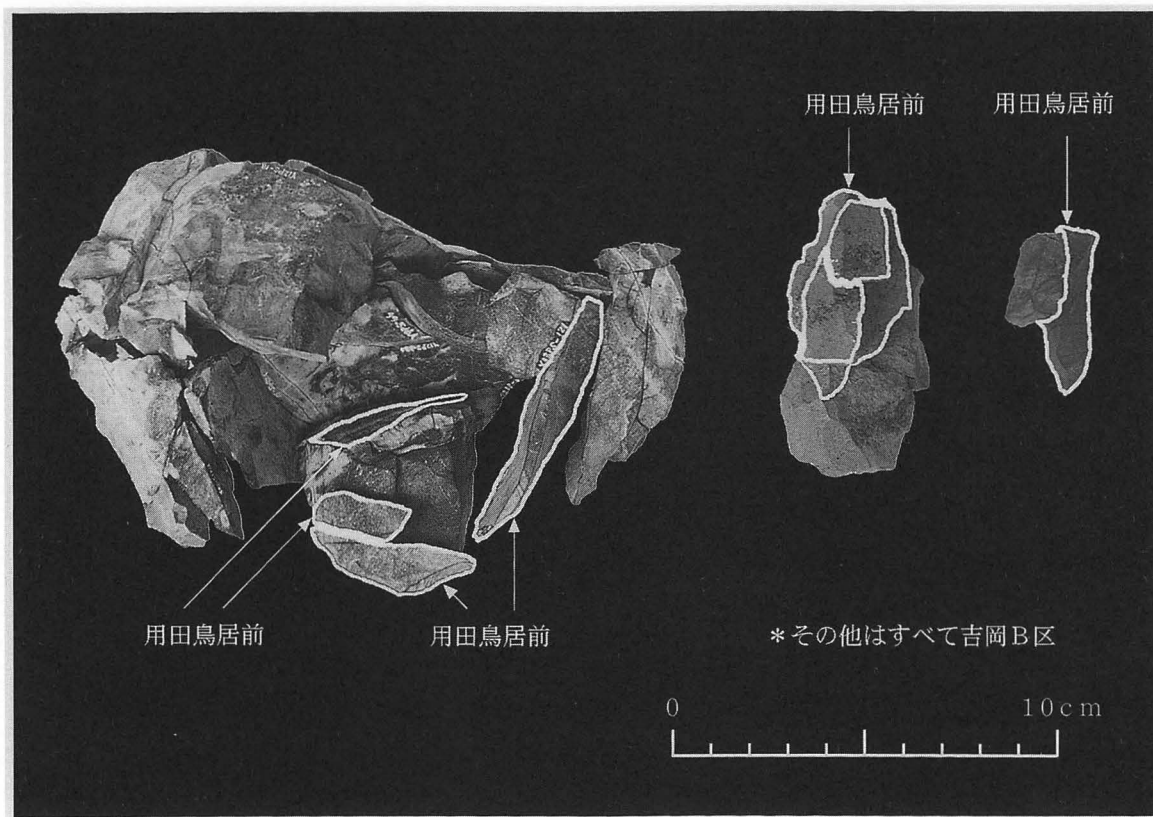


写真1 吉岡遺跡群B区と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡の遺跡間石器接合資料

分できる（第2図）。遺跡間接合が認められた石器は、全て中央部の集中から出土している。

この集中部から西側に約15m程離れた箇所からは、ピットを伴う大形の炭化材集中が同一層位中より出土している。また、1996年度の調査では東側に約27m程離れた箇所から199点の石器集中が、1997年度の調査では南東に約25m程離れた箇所から礫群がいずれも同一層位中から出土している（註1）。

次に両遺跡の内容の差異について検討を行う（註2）。吉岡遺跡群B区では、最も多く出土している硬質細粒凝灰岩が原礫あるいは原礫の1/2程度の状態で補給され、石核・ナイフ形石器・素材剥片などの各石器を製作し、それを他の活動の場に持ち出すという一連の石器製作工程が確認できる。これに対し、用田鳥居前遺跡では台石（1点）・敲石（1点）といった石器製作に直接使用されたと考えられる石器が出土しているが、73点中43点が被熱礫であり剥片剥離作業を施した遺物はわずか28点しか出土していない。さらにこの内8点は、吉岡遺跡群B区でナイフ形石器・素材剥片としての加工が既に施され、本集中部のみで接合関係が確認された資料は2例（剥片+剥片/剥片3点+石核1点）にすぎない。また、石核が2点出土しているが、既に他の場所で複数回の剥片剥離作業が施された後に持ち込まれたと考えられる。つまり、本遺物集中は、吉岡遺跡群B区に比べ石器製作の痕跡が極めて乏しい集中部であると言える。

次に周辺の同一層位中から出土した石器群との関連について検討を行う。当初これらは層位的出土状況・剥片剥離工程等の技術的側面・各集中部間の平面的位置関係などから、各集中部の内容の差は同一集団内における各場の機能差をあらわしているのではないかと推察していた。しかし、遺跡間接合が認められたことにより、この判断にはより慎重にならざるをえなくなった。

まず、124Gr.における遺物集中であるが、ここでは吉岡遺跡群B区ほどではないが、この集中部内における接合例は比較的多く確認できる。特に出土数の多い硬質細粒凝灰岩・凝灰岩質頁岩の接合例は顕著であり、硬質細粒凝灰岩は一部に原礫面を有した石器も出土している。125Gr.から出土した礫群は、被熱礫とともに硬質細粒凝灰岩性の石核（1点）および剥片（4点）が出土しており、これら5点は全て接合関係を有する。なお、現在までのところ124Gr.の遺物集中・125Gr.の礫群ともに両者間における接合関係は認められない。これは遺跡間接合が認められた集中部においても同様であり、現在までのところ礫群も含めたこれら3ヶ所の集中部間における遺物の接合関係は一切認められていない。つまり、これは各遺物集中の独立性を示唆している。すなわち、これらの遺物集中は同時に瞬間的に残された遺物群ではなく、一定の時間差を有して形成された集中であると類推できる。さらに、これらを形成した集団が同一集団でない可能性も十分想定できよう。但し、これらを形成した集団間にどのような関連性が存在していたかは不明だが、出土層位・技術的類似性・平面的位置関係等から、当時の人々がほぼ同じ時期に同じような場所をくり返し利用していたということが推察される。

また、128Gr.からは大形の炭化材がピットを伴い、直立した状態で出土している。これは出土状況等から遺構の可能性が高いと判断できるが（註3）、その性格については不明であった。しかし、この場所を前述のように当時の人々が反復利用していた場と仮定すれば、これを一種の目印的な遺構（ランドマーク）と推定することも可能なのではないだろうか。（栗原伸好）

註1 今回の遺跡間接合が確認された遺物集中周辺は、現道等により調査区が細かく分断されている等の諸条件により、各集中を同一年度の調査で確認することができなかった。

註2 現在出土品整理途上である吉岡遺跡群B区に関する各種データは、吉田政行氏のご教示による。

## 石材から見た接合

本項では砂川期の遺跡（文化層）から出土した石器のうち、その石器製作に用いられている石材種に視点を置き「接合」について考えてみる。

まず各遺跡の接合資料を観察し、その接合資料に、どういった石材が用いられているかを調べてみた。ページ数の関係で一覧表を明示できないが、結果としては予想されたとおり、概ね在地系の石材による接合例が目についた。そのことは、この砂川期の石器群の特徴である「砂川型刃器技法」に在地系の石材が、多く用いられる傾向が一つの要因として考えられる。よって在地系の石材が接合しやすいということではなく、各文化層から出土した石器石材の多くが在地系の石材に委ねられている結果を反映したものと考えられる。

列島有数の旧石器時代遺跡数を誇る相模野台地は、相模川から派生する各河川が樹枝状に台地内を流れ、その浸食によりできた河岸段丘縁辺を中心に数多く遺跡が立地することは周知の事実である。その相模川流域および派生する各河川には丹沢に端を発する凝灰岩系の石材が数多く流れ込んでおり、容易にそうした石材を入手することが可能な環境にある。こうしたことを踏まえ、実際に遺跡から出土する石器を見ても、その大半が凝灰岩系の石材によって作られ、その他、安山岩系の石材なども比較的多く観察される。

接合資料は、石核（残核）に剥片や石刃、またはナイフ形石器などが接合している例が多く、こうした傾向は剥片剥離技術の復元という、接合作業の大きな一つの目的に起因するところが多い。また石核及び剥片その他が残っている石材は、全資料中比較的資料数の多い石材であり、その遺跡（文化層）の主体をなす石材であることが多い。資料数が多ければ当然、接合資料例も多くなり、またその遺跡の整理作業の中で、接合作業にどれだけ時間を費やしたかによっても接合例の実数は変わってくるものである。そして報告書に掲載された資料のみがその遺跡の石器接合例を全て表したものではないことは言うまでもないが、今回本稿執筆にあたっても報告書を元に行っていることをお断りしておく。

そしてまた、前述した剥片剥離技術の復元の他に、接合作業には二つ大きな目的があげられる。一つは接合した石器の平面分布を調べることで、当時の人間の行動を復元すること、もう一つはその垂直分布を調べることで、近接した文化層を分離するという目的がある。こうした平面・垂直的な接合関係は、それらが同時期に使用されていたということを事実として視覚的に証明することが可能である。さらに、肉眼観察によるところが多い石材の母岩別分類作業もまた、事実としての証明は難しいが、空間的広がりを考える上で、貴重な要素足り得るのである。更に母岩別分類作業を証明するのもまた「接合」なのである。

最近発表された綾瀬市吉岡遺跡群B区出土の石器と、藤沢市用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡出土の石器が接合した例は、石材の類似から端を発し、それは相模野台地で発見される石器群に用いられることの少ない、黄玉石製の石器が両遺跡から出土していたことで、比較的容易に同類の石材を抽出することが可能となったのである。黄玉石は相模野台地に限らず神奈川県内の遺跡では石材組成率として僅かであり、点数としてもそれほど多くなく、1遺跡での主体足りうる石材ではない。このような石材が、こと遺跡間の石器接合を進めるときには、抽出しやすいこともあり、キーマテリアル（鍵石材）となりうる。以上のように接合を考える上で、石材種の認識と分類は「接合」の基本的要件であり、各種石材産地の分布と接合の多寡は人類行動の復元に極めて敏感なのである。

（大塚健一）



## 器種組成と接合資料

今回は、用田遺跡群と吉岡遺跡群の遺跡間接合記念ということで、プロジェクト内で、半ば無理矢理？「接合」と関連づけたテーマを言い渡された。悩んだ末、個々の遺跡毎で復元された接合資料の中で、剥片や碎片、残核といった工程器種以外の、ナイフ形石器や搔器、削器、彫器などといったいわゆる決定器種が接合した例は、一体どのくらいあり、どのような形で接合しているのかを調べてみることにした。そこで、用田遺跡群や吉岡遺跡群とほぼ同時期と考えられる、県内のB1層中～下部の石器群に絞り、集成を試みた。

その結果、決定器種の接合というのが、意外に少ないことが判明した。石器の接合率については、特に行政発掘においては、調査者の判断や、整理状況・期間など様々な要因によって、その数が左右されることは否めない。また当然のことながら石器の出土総点数が少ない遺跡では接合資料も少なく、認められない場合もある。しかしながら、石器総出土点数が数百から千点を超える遺跡においても、使用痕を有する剥片や加工痕を有する剥片などを除いた、決定器種が接合する例は、それほど多くはなかった。仮に接合したとしても、1点かせいぜい数点で、1つの接合資料に複数の器種が接合する例は非常に稀である。また、決定器種が接合している資料は、接合する石器点数自体少ない資料がほとんどで、採取された原石の大きさが推定し得るほど、完全な形にまで復元できた資料は極めて少ない。

そこでどんな器種が接合しているのかみてみると、大方の予想通り、この時期に圧倒的な数の出土例がみられる、ナイフ形石器がその大半を占める。その他では搔器、削器、彫器、楔形石器などが数例認められるにすぎない（表1）。

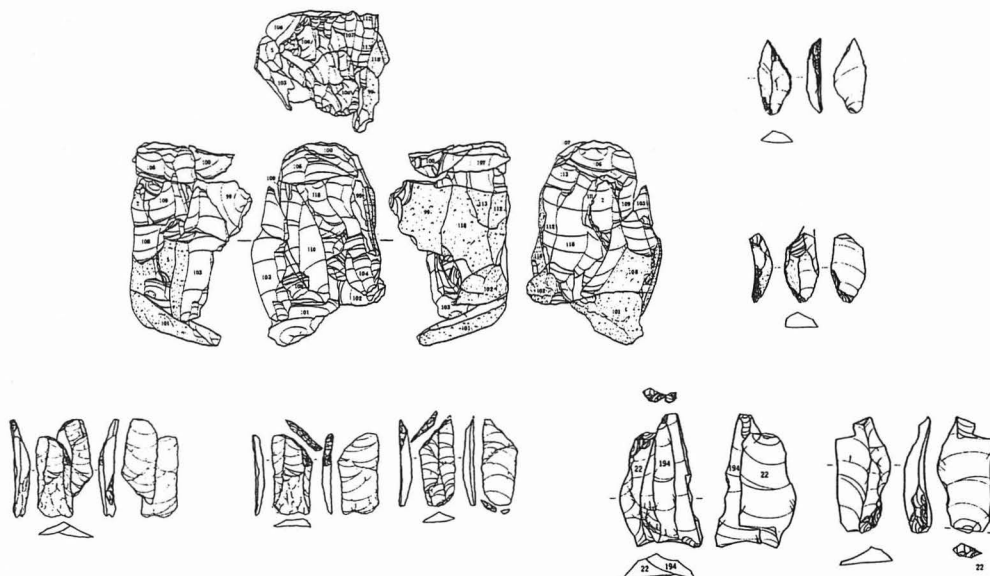
栗原中丸遺跡では実に219点ものナイフ形石器が出土しており、180点程が54母岩個体の資料に帰属し、残りは単独資料等である。つまり、8割以上のナイフ形石器は、複数点存在する個別別資料に分類されている。1つの個別別資料に、実に12点ものナイフ形石器が存在する例もあり、この場で剥片剥離が行われ、石器製作が行われたであろうことは想像に難くない。ところが、実際にナイフ形石器が接合する資料となると、わずか3例しかみられず、その他の接合する決定器種は皆無である。一方、宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡では29点のナイフ形石器のうち10点までが接合し、接合資料は5例認められる。その内の4例は、工程器種を含め10点以上が接合する良好な資料であり、全ての資料に残核が伴う。ところがナイフ形石器以外の決定器種の接合はみられず、接合しているナイフ形石器の数も平均で2点ほどと少ない。宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡の資料No47-Aも30点の接合がみられるものの、ナイフ形石器が1点接合しているだけである。このような例から、石核素材から剥片剥離が行われた場合でも、製作された器種の全てが残されることはなく、その大半はおそらく別の遺跡に運ばれたと考えられる。このような接合資料のあり方は、吉岡遺跡群B区における硬質細流凝灰岩製資料に相当すると思われる。

中村遺跡の184Cの資料では、ナイフ形石器2点が接合する例が認められ、「一定した剥片剥離工程から剥離されている」ことがうかがえる資料である。これとよく似た例は、ナイフ形石器と石刃が接合した月見野遺跡群上野遺跡第1地点のNo19、ナイフ形石器と石刃が接合した宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡のNo14C、搔器と石刃が接合した同No66A、ナイフ形石器と縦長剥片が接合した福田丙二ノ区遺跡の接合22などいくつか認められる。こうした資料は接合数が少なく、残核を保有していない場合が多い。これらは、おそらく他の場所で剥片剥離を行い、その中から目的に適した剥片素材を運んできたものであろう。このようなあり方は、吉岡遺跡群から用田遺跡群に持ち込まれた、前述の硬質細粒凝灰岩製資料に相当しようか（第3図）。

以上の結果から、当時の人々は、荒割りの段階を要するような原石と、石器製作に必要な装備を常に一式携えて移動することはなかった。また、入手した原石素材の全てを消費し、石器の製作から使用、廃棄に至るまでを一つの場所に残すようなこともなかったであろう。そのことは、1つの遺跡に残される接合資料の内、大量に資料が残されていた場合でも、原石塊にまで還元しうる例が極めて少ないといった事実からも裏付けられよう。個々の遺跡では、他の場所で剥片剥離を行って得られた剥片素材や決定器種と、新たに補給した原石素材とが混在し、構成されている場合が一般的である。そして、このような素材消費の偏り等から、遺跡の性格や人々の動きを推定することも、有効な手段なのではなかろうか。吉岡遺跡群と用田バイパス関連遺跡群における遺跡間接合は、旧石器時代研究の上で貴重な資料を提供してくれたものとする。（畠中俊明）

表1 器種別接合

遺 跡 名	文化層	石材種	資料番号	ナイフ	尖頭	掻器	削器	掻・青彫器	楔形	鏃	RF	UF	剥片	砕片	残核	その他接合料	備 考
中村遺跡	V	粘板岩	No.170	1									2		1	4	
中村遺跡	V	粘板岩	No. 76	2									4			6	
中村遺跡	V	粘板岩	No.55	2												2	欠損後、再加工
中村遺跡	V	ホルンfels	No.184	2												2	連続するナイフ形石器2点
中村遺跡	V	硬砂岩	No.121			2							2			4	
中村遺跡	V	チャート	No.45								3					3	ナイフ形石器制作途上の欠損
中村遺跡	V	チャート	No.129	1									1			2	ナイフ形石器制作途上の欠損
中村遺跡	V	チャート	No.238	1							1					2	
月見野上野第1	V	凝灰岩	No.46B	1									3			4	
月見野上野第1	VI	凝灰岩	No.19	1									1			2	
月見野上野第1	VI	凝灰岩	No.19	1									1			2	
栗原中丸	V	細粒凝灰岩	No.18	1			1						5			7	
栗原中丸	V	細粒凝灰岩	No.18	1									1			2	
栗原中丸	V	細粒凝灰岩	No.84	1									4		1	6	剥片の内2点は打面調整剥片
宮ヶ瀬遺跡群(サザラン)	V	細粒凝灰岩	No.2A	2									3		1	6	剥片の内2点は石刃
宮ヶ瀬遺跡群(サザラン)	V	細粒凝灰岩	No.7A	2									16	3	1	22	剥片の内3点は石刃
宮ヶ瀬遺跡群(サザラン)	V	凝灰質頁岩	No.9A	3								1	13		1	18	剥片の内3点は石刃
宮ヶ瀬遺跡群(サザラン)	V	頁岩	No.11A	2									15		1	18	剥片の内1点は石刃・砕片も含む
宮ヶ瀬遺跡群(サザラン)	V	チャート	No.14A	1									11		2	14	剥片の内2点は石刃・砕片も含む
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.4-A	1									4		1	6	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.10-B				1						1			2	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.11-A	2									4		1	7	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.12-C	1									1			2	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.14-B	1									1			2	剥片は石刃
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.16-A	1									9			10	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.31-C	2									1		1	4	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.47-A	1								2	26		1	30	剥片の内2点は石刃
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	頁岩	資料No.63-A	1					2				2		1	6	剥片の内1点は削片
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	黒曜石	資料No.65-B							2						2	
宮ヶ瀬遺跡群(上原)	V	硬質細粒凝灰岩	資料No.66-A			1							1			2	剥片は石刃
長堀南	IV	珪質泥岩	接合例5	1									2		2	5	
長堀南	IV	砂岩	接合例6				1								1	2	
長堀南	IV	チャート	接合例7	2					1				6		1	10	剥片には調整剥片含む。
福田丙二ノ区	II	硬質細粒凝灰岩	接合6	1									7			8	
福田丙二ノ区	II	珪質頁岩	接合18	1									3		1	5	
福田丙二ノ区	II	黒色頁岩	接合22	1									1			2	
福田丙二ノ区	II	チャート	接合30	1									3		1	5	
南葛野	II	黒曜石	II-11-(10)			2							1			3	B2の可能性大
南葛野	II	チャート	II-12-(4)	1									1		1	3	B2の可能性大
下鶴間甲一号	IV	黒色頁岩		1									1			1	剥片は石刃
下鶴間甲一号	IV	安山岩		1											1		図無し・詳細不明



第3図 吉岡遺跡群のな接合例と用田バイパス関連遺跡群のな接合例

(上段：宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡資料No 7-A 下段：中村遺跡資料No.184 (左) と福田丙二ノ区遺跡接合資料22 (右))

## 接合資料と石器製作・使用過程

今回は、石器文化研究会のシンポジウム等で話題となった、いわゆる「砂川期」として時期比定される接合資料と石器製作・使用過程についてのテーマが与えられている。そこで、ここでは石器製作・使用過程の観点から近年当財団が調査を行った福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層の接合資料を寺尾遺跡第Ⅳ文化層（鈴木 1980）の接合資料との比較において捉え直し、その後で今年新聞発表等で話題となった吉岡遺跡群及び用田バイパス関連遺跡群の遺跡間接合資料の内容について簡単に触れることにする。これにより、遺跡内接合資料と遺跡間接合資料を比較し、どの部分では共通し、どの部分では異なっているかを具体的な例を上げて検討したい。しかし石器製作・使用過程といっても、ここでは単純に道具の素材もしくは道具そのものと考えられる剥片とその原材料と考えられる石核、道具もしくは道具の廃品と考えられる石器からなる3つの関係のみを念頭に置くこととする。そこで、これら3つの関係をここでは関係類型と捉える。もちろんこれら3つの関係の間には、残滓と考えられる碎片があることを忘れてはならないだろうが、ここでは剥片の中にも含める。これらの関係を行動の観点から説明すると、無数の諸作業と思考の織りなす軌跡の一部であると理解可能である。確かにこのような剥片や石核あるいは石器といった実際の機能・用途を見込んだ器種分類だけでは、石器群と呼ばれるものの内容、つまり該期のヒトの行動が、どのようなものであったかを正確に復元できるという保証はどこにもない。とはいえ、器種分類及びその分類された器種間で接合関係が成立する場合、それによって明らかにされる時間的な前後関係と空間的な広がりの違いから抽出される行動類型、すなわちヒトの行動のあり方は、石器群として把握される内容を構成する要素である石核や剥片、石器等を距離数や個体数あるいは種類数の違い等に還元し、これらを何らかの実体的な単位として類型化した上で、それらの諸類型を一連の構造化された過程として提示する諸関係の類型化を抜きにして、その理解の前提を示すことは不可能であると言える。ここでは接合資料から明らかにされる石器製作・使用過程は具体的なヒトの活動のあり方を示す前提を形成するものであると理解し、これらの関係を探ることによって上記した各遺跡の比較検討を行うことにする。

寺尾遺跡第Ⅳ文化層・福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層の遺跡内接合例と吉岡遺跡群・用田バイパス関連遺跡群の遺跡間接合例を、上記した石核と剥片、石器の3つの関係が中心となる石器製作・使用過程の関係類型と行動類型に簡単にまとめる際に、砂川遺跡の分析を通じて明らかにされた遺跡に遺存する個体別資料の諸類型を、接合資料を中心とした石器製作・使用過程の関係類型と行動類型として捉え直す作業からはじめたい。砂川遺跡で捉え直される関係類型と行動類型の接合を中心とした特徴を抽出すると以下の通りである。

### 類型A 関係類型 石核との接合

行動類型 より最終的な剥片剥離に連係する石器（搬入）製作・剥片もしくは石器の使用・搬出

### 類型B 関係類型 剥片もしくは石器と剥片の接合

行動類型 より初期的な剥片剥離に連係する石器（搬入・搬出）製作・剥片もしくは石器の使用

### 類型C 関係類型 剥片と石器の非接合

行動類型 剥片もしくは石器の搬入・使用・廃棄

以上単純化して示したが、補足説明すると関係類型では接合例と非接合例の関係を中心とし、行動類型では遺跡に遺存する個体別資料の状態から辿りうる直前の作業内容を中心として記述した。また遺跡に遺存する個体別資料は出土状態からブロックと呼ばれる集中箇所では一種以上あり、しかも原石とされるものの状

態に完全に復元される例のみで構成されるあり方は通常では期待されないが、上記した類型A・Bはブロックとの関係に極めて相似することが砂川遺跡分析では指摘されている(安蒜 1992)。従って接合を中心とした各類型の関係を主にブロック間との関係において把握することで、どのような内容が抽出可能かが問題となるが、ブロック間接合と各類型の関係を最初に福田丙二ノ区、続いて寺尾の順にまとめる。

表2 福田丙二ノ区第Ⅱのブロック間接合

ブロック	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
類型A	○		● <sub>1</sub>	○		● <sub>7</sub>		● <sub>13</sub>	○	○				
類型B	● <sub>3</sub>	○	○				● <sub>6・11</sub>	● <sub>12</sub>	○		● <sub>7</sub>		● <sub>8</sub>	● <sub>9</sub>
類型C	○	○	○	○	○	○	○	○	● <sub>14</sub>	○	○	● <sub>8</sub>	○	○

表3 寺尾第Ⅳのブロック間接合

ブロック	1	2	3	4	5	なお白丸は各類型の存在、黒丸は其中でブロック間接合、その右下の数字は接合関係が成立するブロックを示した。このことから①								
類型A	○	● <sub>1</sub>			○	類型Aのみのブロックは福田丙二ノ区と寺尾ではともにない。②類								
類型B	● <sub>2</sub>	○		○	○	型Cのみで構成されるブロックは福田丙二ノ区と寺尾ではともに								
類型C	○		○	○	○	ある。③福田では3類型が全てあるブロックは計4あり、寺尾では								

計1あるが、福田丙二ノ区ではそのタイプの内いづれかがブロック間で接合関係を持つのに対して、寺尾では類型AとB以外では、ブロック間で接合関係を持たない等の点が指摘される。いいかえると、ブロック間で接合関係が見られる諸タイプの組合せは、福田丙二ノ区と寺尾では、類型AとB、類型BとB、類型BとCに限られるが、更にこのことはブロック間接合を超えた吉岡遺跡群及び用田バイパス関連遺跡の遺跡間接合資料にも共通する(栗原伸好・吉田政行両氏から御教示いただいたが、現在整理中であるため全貌では明らかではないということを予め断っておく)構造化された組合せということである。

以上関係類型として述べたが、行動類型として説明すると、最終的な剥片剥離に連係する石器製作(類型A)と初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)と、初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)同志及び、初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)と石器使用から廃棄に至る過程(類型C)、以上はブロック間で連係する組織化された行動を示す可能性が指摘されるが、最終的な剥片剥離に連係する石器製作(類型A)と石器使用(類型C)はブロック間で連係しない把握不可能な行動を示す可能性が指摘される。これらのことから該期の石器群に位置付けられる石器製作・使用・廃棄はある一定の規則性を示し、管理・運営された行動であった可能性が福田丙二ノ区と寺尾遺跡内のブロック間接合関係から窺え、遺跡間を超えても同様の内容を持つ可能性が考えられる。(井関文明)

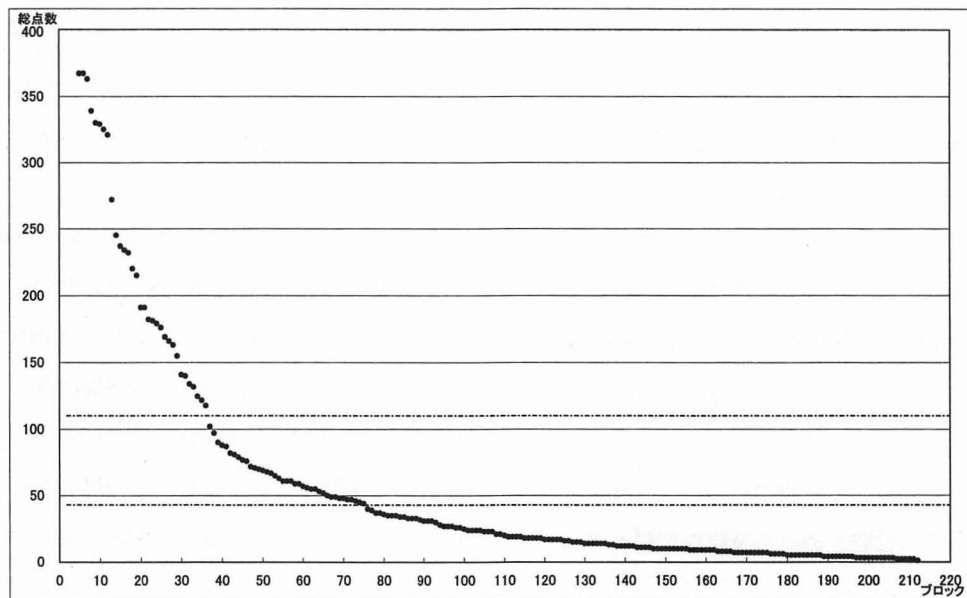
## 遺跡間接合の可能性(一石材流通モデルの構築に向けて一)

**背景** 吉岡遺跡群と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡での接合環境は別項に詳しい。両遺跡の検出資料は、現在整理段階ということで詳細なデータは不明であるものの、各担当者からの聞き取りとして、吉岡の石器群では遺物数が約800点を数え、主要石材の構成率としては凝灰岩系が約80%を占めており他の石材を凌駕している。用田の石器群では遺物数が約70点であり、主要石材の構成率としては凝灰岩系が約52%、安山岩系が約25%、砂岩が約12%と、いくつかの石材の組み合わせにより組成されているとのことである。

そこで石材獲得戦略の人類行動等々の話はとりあえず脇へ置き、この事象のみで伺えることをまとめると、今回接合関係が明らかになった資料は、より大規模で一つの石材が突出して組成されるブロックから中規模で数種の石材により占有されるブロックへ石材が移動したということである。中でも凝灰岩の占有率は、吉岡の石器群では約80%、用田の石器群では約52%と低くなっているということが大きな特徴と言えよう。

**目的** 吉岡遺跡群B区B B 1層下部検出ブロックの石器群と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡検出ブロックの間で成立した接合関係が、他の遺跡や他の遺跡間同士で成立する可能性存否を推察してみたい。それには、神奈川県から東京都の一部（多摩川以西）について遺物集中地点単位（ブロック）全件の傾向を明らかにした後、両遺跡を判別しその相関について考えることとする。

**分析資料** 現在のところ、多摩川以西から神奈川県下のエリアで発見されている当該期の遺跡は45遺跡を数える。それらのうち「石材名」・「器種組成」・「石材組成」等が不明な資料を除き、最終的に多摩ニュータウン（以下、TNT）27・TNT113. 115・TNT125・TNT167・TNT388. 389. 431・TNT426・宮ヶ瀬遺跡群（以下、遺跡群を除く）上原・宮ヶ瀬サザランケ・宮ヶ瀬中原・鷲ヶ峰・下森鹿島・下鶴間長堀・花見山・月見野上野（第1、3地点）・古淵B・高座渋谷団地・寺尾・受地だいやま・上草柳（2、4地点）・真光寺広袴向・長堀南・長堀北・南鍛冶山・K. F. C. の24遺跡212ブロックを対象とすることとした。本来ならばブロック間接合等を考慮しユニット単位で検討すべきであるがユニット全体が検出されていると認識すること自体困難であるため、ブロック単位とした。



第4図 分析対象ブロックと総遺物数

**ブロックの規模とその性格** さて、ブロックの規模を、大規模、中規模と言い分けてみたが、規模の大小を判別する基準が明瞭しない。そこで今回対象としている212ブロックをもとに、大変便宜的ではあるが一応のボーダーを設けることとした。各ブロックの総遺物数を多い順に整列一覧すると、総点数の一番多い南鍛冶山遺跡の遺物集中部0401（報文：分布の中心はL 1 H層）の1084点から1点までを数える。この中で隣接するブロックの総点数が、ある程度のブランク（41～43点、103～117点）によって分離しうるボーダーラインを2本設定し区分した。それぞれの規模は以下の通りである（第4図）。

大規模：118点以上の総遺物数を持つブロック（36ブロック）。



中規模：44～102点の総遺物数を持つブロック（39ブロック）。

小規模：40点以下の総遺物数を持つブロック（137ブロック）。

さて、各ブロックの性格的な偏りでは、それぞれのブロックの総点数と第一石材の占有率を組み合わせることにより量的分布を観察する方法を採った。この段階では各石材のかたよりといった詳細なデータは使わず、ブロックの中で一番多く使用されている石材（第一石材）のあり方といったことに重点を置き分類した。結果、いくつかのまとまりを見ることができたため、それぞれのまとまりをグループA～Iと称することとした（第6図）。

以下、それぞれの特徴、分類されたブロック数を記す。

グループA：総点数132点以上で、第一石材の占有率が77.35～100%（19ブロック）

グループB：総点数17～102点で、第一石材の占有率が86.36～100%（25ブロック）

グループC：総点数1～19点で、第一石材の占有率が100%（26ブロック）

グループD：総点数4～87点で、第一石材の占有率が72.22～88.89%（41ブロック）

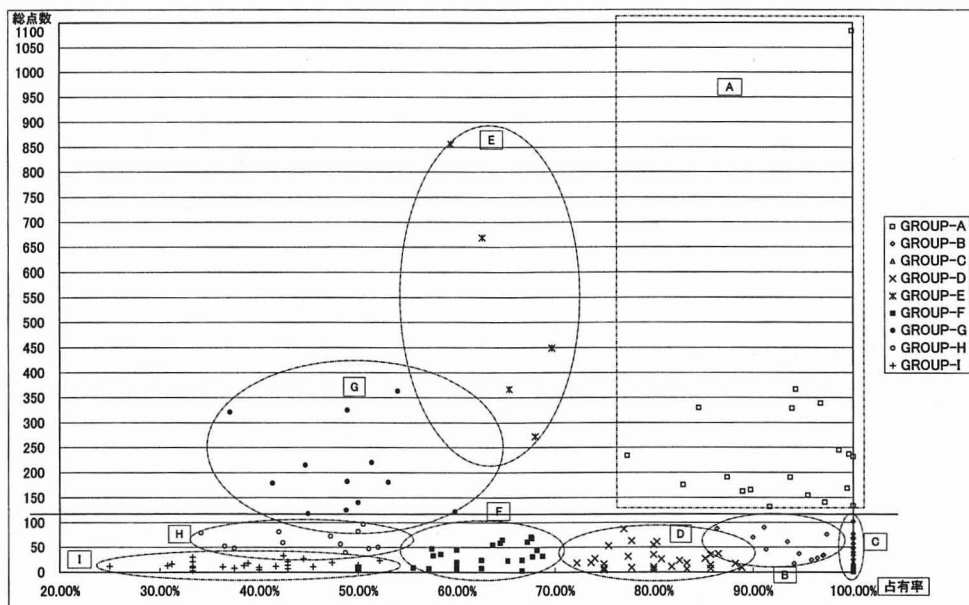
グループE：総点数272～856点で、第一石材の占有率が59.46～69.71%（5ブロック）

グループF：総点数3～71点で、第一石材の占有率が55.56～68.75%（35ブロック）

グループG：総点数118～363点で、第一石材の占有率が37.07～59.84%（12ブロック）

グループH：総点数39～97点で、第一石材の占有率が34.18～52.00%（12ブロック）

グループI：総点数2～33点で、第一石材の占有率が25.00～52.17%（37ブロック）



第5図 第一石材の占有率／総点数（1）

それぞれのグループを大中小の規模に照合するとグループA・E・Gが大規模に分類される。さらに大規模を取り除いた散布図で観察を行ったところ、グループB・D・Fについて細分可能となる。当初設定したボーダーラインを若干またいでグルーピングされる例が見られたがおおむね中規模と小規模とに区分できることを確認した（第6図）。この段階で細分された小グループについてそれぞれ特徴、帰属ブロック数を記す。

グループB-1：総点数48～102点で、第一石材の占有率が86.36～100%（13ブロック）

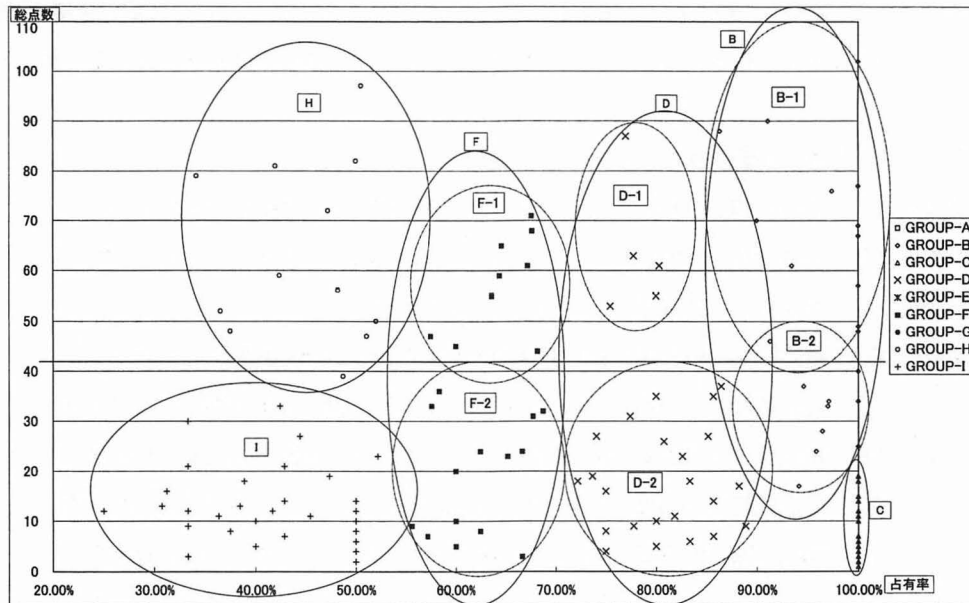
グループB-2：総点数17～46点で、第一石材の占有率が91.30～100%（12ブロック）

グループD-1：総点数53～87点で、第一石材の占有率が75.47～80.33%（5ブロック）

グループD-2：総点数4～37点で、第一石材の占有率が72.22～88.89%（36ブロック）

グループF-1：総点数44～71点で、第一石材の占有率が57.45～68.18%（9ブロック）

グループF-2：総点数3～36点で、第一石材の占有率が55.56～68.75%（26ブロック）



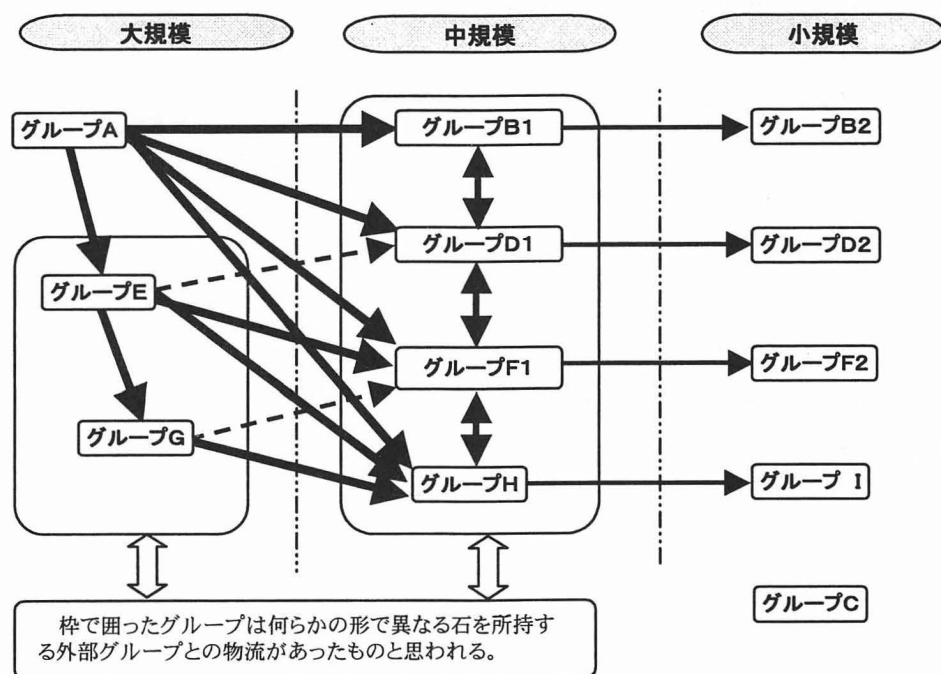
第6図 第一石材の占有率／総点数（2）

これまでの結果をまとめると、大規模：グループA・E・G、中規模：グループB1・D1・F1・H、小規模：グループB2・C・D2・F2・Iと分類することが出来、アルファベットが進むにつれ第一石材の占有率が低くなっていく様子がわかる。また、各グループの構成ブロック数をみると、異例なくすべてのグループにおいて中規模に属するものよりも小規模に属するブロックが多く構成している。

また、注目したいのは第5図において図の左方へ行けば当然第一石材の占有率が落ちて行くわけであるが、グループB1とB2、D1とD2、F1とF2 HとIの間で第一石材の占有率に大きな差が見られないにもかかわらず、それぞれのグループには構成するブロックの散布する総点数上の領域に明らかな差異が見られる点である。これは、中規模から小規模へ石材移動する上で何らかの要素・傾向が介在した可能性があろう。さらに、大規模に区分されたグループA・E・Gにおいては、グループAで突出している1ブロックが気にはなるものの、散布する総点数上の領域がAよりもE、EよりもGとだんだん低くなっていることが挙げられよう。

**展開** これらの事象から各グループのあり方を考えると、大規模グループは獲得した石材自体の分配や物流品としての道具を製作した場であったと考えられようか。また、先に記したとおり総点数が少なくなると同時に第一石材の占有率が低下するということを考える上で、“一つの大規模グループは、複数種の石材を一度に入手することは無い”と仮定するならば、グループAはどんな方法によるものかは判らないが、直接石が搬入された場であったろうと考える。また、グループAに対し、EやGでは直接ある種の石材を仕入れてきた訳ではなく、他の石材を持つ集団との交流という手段を用いて石を入手した交易地として存在していたということも一つ考えられる。第一石材の占有率が落ちるのはたとえばグループEやGはグループAから石材を入手していた事もあったろうし、他の石材を持つ集団との物品の交換を含めた交流によって石材を入

手していたと推論する。そのことが総点数の格差としてグループに現れていると思われる。中規模グループは、石を直接入手している可能性も否定できないが、大規模グループからもたらされた石材を利用したとすれば、石材の特性を生かした道具を所持するために、グループ間や他集団との物流によって石材種が複雑化しているのではないだろうか。そして遺物数が充実していることから、狩猟を行う上で必要な道具を製作・修理をした拠点であったと想定したい。小規模グループは狩り場等への道程で、急遽道具立ての中の一部について修理を行った場であると考えられるのではないだろうか。グループCは、中規模のどのグループからも石材の移動が可能であったパターンと考えられる。



第7図 石材拡散の概念

**吉岡・用田** 今回の分析結果に吉岡と用田の石器群をあてはめると、吉岡の石器群はグループA、同様に用田の石器群はグループF1ないしHの帰属となる。いずれにせよ大規模グループから中規模グループへ石材が持たされた事例である。それならばグループAである吉岡の周辺部を半径2km・5kmと範囲を広げて調査例を調べ、各石材の占有率が似通った組み合わせを有するブロックを探索することによってある程度、吉岡から流出した石材を追うことが可能となるのではないだろうか。ちなみに2km圏内の調査事例では、同じ目久尻川流域に早川天神森遺跡が所在し、河川を異にするが河川を跨がないところに地藏坂遺跡や上土棚遺跡が位置する。また、蓼川を跨ぐことから可能性としては低くなるであろうが、与蔵山下遺跡では詳細不明な出土資料、綾瀬市No50遺跡は採集資料が報告されている。

**課題と展望** 本稿では、紙面の関係から十分なデータの提示は行えなかった。また、推論自体も練れていない部分もある。今後は今回の試論に各石材の占有率や第二石材、第三石材の占有率の組み合わせなどをあてはめて判別し、地理的条件による石材の広がりなどについても推論を進めてみたい。 (三瓶裕司)

## おわりに

永年にわたり私たちプロジェクトチームを率いて頂いた白石浩之さんは、1999年度で退職され、愛知学院大学へと赴任された。あまりにも突然の異動に、私たちプロジェクトの旧石器研究が順調に進捗可能か否か不安な場面もあった。しかし、白石さんの石器研究に対する真摯な姿勢は、私たちチームが学ぶべきそして継承すべき姿勢であり、相模野石器研究を通して白石さんへの学恩に報いるべきと一丸となったのである。

そうした折り、7月11日の吉岡・用田の遺跡間接合に私たちは色めきだち、収蔵資料の同一母岩の検索と検討に至っているのである。そして、その成果は両遺跡の整理作業においてさらなる飛躍と新資料の提示があると信ずるのである。今後実践する接合作業は既存資料の統合と抽出であり、遺跡間接合（異所間接合）は脱遺跡の構築を目指す気配もある。遺跡内母岩別資料、遺跡間母岩別資料あるいは原石別資料など、新たな石器整理作業の構築である。骨器、角器、木器、毛皮、植物などの有機遺存体の欠如する日本の旧石器研究が、今回の石器製作痕跡遺跡の吉岡遺跡と使用痕跡・廃棄痕跡遺跡の用田鳥居前遺跡という従来の拠点と出先の相関関係を、遺跡間接合の実証は、その反転をも視野に容れることも可能となるのである。

がしかし、11月5日の記者の問い合わせに、答える声も震えがちに一気に今までの思いを吐露したことも事実である。最大・最小・最新・最古を追い求めたA級官民先行のヴィジュアル誌の陥穽は、まさしく旧石器世紀末を露呈した。私たちのプロジェクトにも座散乱木・馬場壇・高森・大原B・ひょうたん穴の調査に参加・見学した当時の学生・研究者達がいる。しかし、今般石器研究者として慚愧の念に耐えないし、また石器学徒として保身することなく人類遺産の改竄について心からお詫び申し上げねばならない。（砂田佳弘）

### 引用・参考文献

- 安蒜政雄 1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」駿台史学86 pp.101-128
- 五十嵐彰 1998「考古資料の接合—石器研究における母岩・個体問題—」史学67-3・4 pp.105-128
- 笠懸野岩宿文化資料館 1996『接合資料を読む』資料集 pp.39
- 川口潤 1993『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集 白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡 川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書』pp.249
- （財）かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター編 1998『公開セミナー記録集 用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材／旧石器時代の住居状遺構を探る』pp.103
- 杉原莊介 1956『明治大学文学部研究報告考古学第一冊 群馬県岩宿発見の石器文化』pp.93
- 鈴木次郎 1980「第Ⅳ文化層」寺尾遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 pp.135-178
- 砂田佳弘 1993「相模野の石器再生—器種形態の存続と改変—」神奈川考古 29 pp.1-23
- 鳥畑寿夫 1956「福島縣成田発見の石器に就いて」上代文化 26 pp.23-28
- 藤森英一・戸沢充則 1962「茶臼山石器文化」考古学集刊 4 pp.1-20
- 松沢重生 1959「石器研究におけるテクノロジーの一方向」考古学手帖 7 pp.1-2
- 松沢重生 1960「石器研究におけるテクノロジーの一方向Ⅱ」考古学手帖 12 pp.1-3
- 松沢重生 1997「八千穂村池の平遺跡群トリデロック地点石刃技法の検討—とくに資料の剥離面および接合を読む視点から—」長野県考古学会誌 82 pp.1-15
- ハヶ岳旧石器グループ 1996「野辺山中ッ原1G地点の2次調査」第8回長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨— pp.48-53
- 山田しょう・志村昭昭 1989「石器の破壊力学（1）」旧石器考古学 38 pp.157-170
- 山本克・安部英二 1998「居尻A遺跡（IJA）」津南町文化財調査報告第24輯平成10年度津南町遺跡発掘調査概要報告書 pp.2-5
- 渡邊仁 1948「所謂石刃と連続割製法に就いて」人類学雑誌 60-2 pp.33-39